

2018年11月30日

報道関係各位

公益財団法人 笹川スポーツ財団

平昌 2018 パラ出場選手、リオ 2016 パラ出場選手を調査対象とした 『パラリンピアンに対する社会的認知度』調査結果について (公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 調査)

公益財団法人笹川スポーツ財団 (SSF) はスポーツに関するさまざまな調査を実施するとともに、外部機関と協力・連携し、スポーツの振興に取り組んでいます。このたび、当財団の小淵和也主任研究員がプロジェクトメンバーとして担当した、ヤマハ発動機スポーツ振興財団 (YMFS) による「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」の結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

本調査は2018年平昌パラリンピックや2016年リオパラリンピックに出場した日本代表選手の氏名や出場種目の認知状況や、平昌パラリンピックの視聴状況などを、全国の市町村に在住する20歳以上の男女約2000名を対象にインターネットで実施したものです。

※詳しい調査結果は、公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団ウェブサイトをご参照ください。

<http://www.ymfs.jp/project/culture/survey/201806-paralympian/>

【調査結果 トピックス】

平昌 2016 パラ出場選手の認知度(「知っている」・「聞いたことがある」の合計)は、「成田緑夢(50.9%)」、「村岡桃佳(9.6%)」、「南雲啓佑(9.0%)」、「山本篤(6.9%)」、「新田佳浩(4.9%)」の順

平昌大会に出場した選手の認知度をみると、成田緑夢選手の「一人勝ち」が明らかになった。成田選手を「知っている」(29.2%)と「聞いたことがある」(21.7%)を合わせると回答者の過半数が成田選手を認知していた。また、図表2の結果から、成田選手の実施競技がスノーボードだと認識している人も84.1%と非常に高く、多くの人々が『スノーボード選手・成田緑夢』を認知していることがわかる。注目は、平昌大会を観戦しないにもかかわらず、『スノーボード選手・成田緑夢』を77.7%の人が認知していることである。平昌大会に出場した選手のなかで、観戦しない人の認知度が約8割となったのは成田選手のみにもみられた傾向であり、成田選手が「障害者スポーツ」「パラリンピック」の枠に留まらずに、メディアで取り上げられていたことが推し量られる。

2020年東京大会に向けた社会環境の整備は着実に進んでおり、パラリンピック自体は大成功の予感を漂わせる。東京で開催される2回目のパラリンピックに求められるのは、“その先”である。「障害者がいて当たり前の社会」が価値観として根付くためにも、ヒーロー・ヒロインは必要となる。これまでの足跡からも成田選手に、その役割を期待せずにはいられない。

【SSF 小淵和也 主任研究員 コラムより一部抜粋】

【調査概要】

主な調査内容／パラリンピアンへの社会的認知度、平昌 2018 パラリンピック大会の視聴状況
日常生活におけるスポーツ環境

調査対象／全国の市町村に在住する20歳以上の男女2,000名

■この件に関するお問合せ先

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団 (YMFS) 担当：尾鍋氏

TEL：0538-32-9827 FAX：0538-32-1112